

Title	哲学文献紹介(二)
Author	武田, 弘道
Citation	人文研究. 7 卷 5 号, p.627-632.
Issue Date	1956
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

哲学文献紹介 (二)

武田 弘道^{ヒロミチ}

(二) 意味論

前回「第一巻第十一号」に紹介した論理学の著作は一般的には「狭義の論理学」として通っている著述を主体とするものであった。そこでは、体系はいずれも函数的に組織された算法―又は演算 (calculus)―かまたはそうした引き直しが予想される体系であつた。そうした函数的特性を顧慮の外において、しかも、その体系の妥当が暗示されるためには、それは直観的な明晰性をもつしか主張できないのである。しかし、その函数的特性―ここでは極小の様相に当る―は特定値をとるということにすぎない。それらをわれわれは「真」と「偽」の二つの値 (真理値) として解釈することを当然としてきたのである。もちろん、多値論理学や様相論理学はそれらの「真・偽」を修飾したものであったが、だが、「真・偽」その他の、体系外のことを指示する、用語なしでは、どんな論理体系でも「論理的な」

適用を得ることがないだろう。

つまり、われわれが使っている「論理」といわれているものは、論理学上の演算 plus 「記号-」解釈 (interpretation) なのである。その解釈が唯一な (sc. categorical) model (模型) を得るときは問題はないとしても、実状としてはその解釈に氣を奪われ、また一度得た解釈の型を墨守することは普通であろう。そうした解釈の方法についての規準となる主要な問題は意味論上の問題である。

ここで「意味論的」というのは、記号と記号外の事物との聯関の上に立つことである。理論的意味論は構成的であるのに対し、經驗的または記述的意味論は歴史的に与えられた言語についてその部分体系の相互の間に成立つと見える翻譯規則として「意味」を提示しようとする。この視点は従来は「意味」を具体化する傾きをもっていたので、理論的意味論は批判的な哲学的活動としてその領域に参加しようとするのである。

因果の意味論

Ogden, C. K. and Richards, I. A., *The Meaning of Meaning*, 1923. Revised 1926. —石橋幸太郎訳 一九三五、改訳、一九五〇、刀江書院。
Ogden, C. K., *Word Magic*, 1923.

Richards, I. A., *Principles of Literary Criticism*,

1925.

言語に関する問題の取扱いの異常な困難は、その取扱いがまた歴史的社会的に制約された言語に依っていることに大いに基づいている。第一の書物は、言語が思考へ及ぼす悪影響を指摘し、それから免れるために科学的な記号論 (science of symbolism) を提唱したものである。記号論はいわば中性的な言語で書かれなければならない。そのため「意味」という語の用法を広く蒐集して、その用法自身がひき起している困難を分析し、それを除去する方法を提案したのがこの著作である。こうした、いわば経験的累積の、方法は著者の採る経験的証拠に頼りすぎるのであるが、その集積の豊富さは言語教育の実際的な方法にとって有効な示唆を多くもつ著作の続行をうながせるものである。第二のものはそうした社会心理的な見地に導かれるものの代表の一つであり、第三のものは、第一が指示的意味を主題としたのに対して、情動的意味を追求したもので、後の Stevenson による道徳的命題の情動理論に受け継がれた。第一と第三とは、その応用的価値を問うまでもなく、類書を抜きでた記念的な著作と言える。

われわれが議論に当って曲解や誤解をするのは、記号と「被指示物 (referent)」との間に直接の關係が現実的に存在す

ると考えるからである。そうではなく、「記号 (symbol)」が指示物をもつ、つまり意味をもつ、のは記号を使うからである。「すなわち、著者たちは、記号と指示物との關係を想定されたものと認め、両者の間に解釈のはたきを入れ、それを reference (指示作用) 又は思考と呼び、それと記号との間にまたそれと指示物との間に因果的な連絡があるとする。記号は道具にすぎないのである。心像とか觀念が記号に直接に結びつくとする所に、過去のいかなる理論もがもつ困難と意味の実体化との源があると指摘される。

記号は指示作用に対して因果的關係に立ち、指示作用は指示物に対して直接にか間接に (記号場の系列を辿って) か因果的關係に立つ。この事態は最も簡単な場合には、条件反射の図式に似ていよう。記号を初発の刺激ととり、指示物への關係を適応ととるならば、この「解釈」の理論は著しく行動主義的である。しかし問題点は、ちょうど「条件づけ」に当る部分の説明にあり、なぜそれが行動主義的な因果關係の解釈へ引直されるかという理由を挙げられるかどうかにある。

その点についてはかれらの「意味論」は社会的・制度的条件づけに関して豊富な資料を提示した点ではすぐれているが、むしろ資料に頼りすぎているうらみがある。方法の理由の提示に弱いと言える。そしてそれは他面では、伝統的な文法用語や伝

統的論理學が思考方法へ指令するために編み出した用語や規則に根を生やしすぎたことからきているように見える。

それでも、従来の「知覚」や「真理」についての困難は、意味論を組立てる用語の使用を正しくすることによって解かれるものの多いことを指摘しているのは卓見である。

行動主義的見地から意味論の研究を推進して、記号理論の体系を立てあげたのは Charles Morris である。彼自身ではその理論を因果型と性格付けたわけではないが、多くのひとがそう認めている。かれの社会心理学は多くの点で G. H. Mead を受けついでと見られる。

Charles Morris, *Logical Positivism, Pragmatism, and Scientific Empiricism*, Actuahtés Scientifiques etc.

No. 449, Paris, 1937.

—, *Foundations of the Theory of Signs*, International Encyclopedia of Unified Science, Vol. I, No. 2, Chicago, 1938.

—, *Signs, Language, and Behavior*, New York, 1946

(巻末に丹念な定義集を収録)

第一は一九三五・六年の五論文を含む。それらのなかで、彼は論理実証主義とプラグマティズムがそれぞれに開拓した意味の象面の綜合をはかり、それに応じて、経験論の古典的形態を

修正することによって、経験的価値論や経験的宇宙論をも含む

一般学問としての哲学を「諸言語の言語」——一方の側面は「言語について」「語るため」の言語」、他の側面は一般的意味学

(semiotic)——と定義して、哲学を科学的経験主義の上に立たせた。彼は意味の三つの象面を、論理的(形式的)と生物学的(目的)と経験的と特徴づける。論理的な連絡、予期、指示がそれぞれの主題である。意味のこの三象面に対応して第二の

著作では、構文法(syntactics)と pragmatics と意味論

(semantics) とが「科学の科学」の新しい機関としての意味学(semiotic)の三部門として分化され、それぞれ、記号相互

の關係に、記号と使用者の關係(解釈)、記号と記号外の指示物との關係と携わるものと定義される。彼の方法の長所は上の三象面を相補的と見ることにあって、例えば、ある体系の中で言語外の対象について語る言語がそれ以外の用法では言語について語る言語となっており、その解釈において、それに対応する二様の意味論的な關係を区別して理解することができるといふように、構文法上の取扱いが、意味論やプラグマティクスにその対応物を見つけさせる索引の役割を認めた点である。もちろん、彼自身の本領は記述的(経験的)プラグマティクスにあり、記号の発案や使用によって使用者自身についての所見を得ることであり、またそのためには、記号の純然と形式

的な(例えば基本的な科学言語でのような)性質によつて定義されるものとしてでなく、生物的・社会的見地から記号の基礎理論を述べる言語を作ることであつた(上記の定義集を参照されたい)。

ここでモリスの先づとつた途はオグデンとリチャーズの、なお因果型の理論の困難から、「記号」の定義を次の二点で解放することである。まづ、後者にあつては、記号から指示物への関係の方向は、記号使用者を中介にするに止って、一方的つまり非対称であることが確立されていない。すなわち「間接的」と但し書をつけるに止って、指示物がその記号の原因とはならないことが十分に言えていない。またこのことは第二点をも含んでいるようであるが、つまり、原因と結果とは同時的共在の関係に立たないばかりでなく、原因となつた対象の不在に際しても結果が起ることである。そこでモリスは、結果の代置としての刺戟ではなく、準備刺戟という考えを導入する。これは、つまり、傾向とか態勢(disposition)をひきおこす刺戟

である。この傾向という考えは既に生理学主義の心理学者リポーにとつても重要な仕事であつた。言語理論の学者にとつては更に「傾向」の語句は、外延の見地からは、構文法上の企てをもつては攻めるのに困難だという事情がある。また、その困難は価値語が共通にもっているものでもある。内包とか志向としての語句は、外延としての語句がものをつくる行為の設計であるのに対して、行為をつくる行為の設計となるが、その性質上観察的に確定しがたい。観察語ともの(コミュニケーションの主題として比較的には大いに安定な対象)を指示物とする語句とで、どのようにこの困難を切り抜けられるかがモリスにとつての課題である。例えば次のような分類は、なおこれからも証拠を求めるものと見てよいだろう。なおモリス教授が、価値の位相について数学的な定式化さえ許すだろうような模型を示されたことと思ひ合せて、意味の仕方の種々相の分類を掲げる(第三著作、これは「思想の科学」第二巻第二号 昭和二十二年)に紹介されている)。

mode / use	Informative	Evaluative	Inictive	Systemic
Designative	Scientific	Fictive	Legal	Cosmological
Apparaisive	Mythical	Poetic	Moral	Critical
Prescriptive	Technological	Political	Religious	Propagandistic
Formative	Logico-mathematical	Rhetorical	Grammatical	Metaphysical

因果型の意味理論に対する有力な批判としては次の論文集の中の該当論文などがある。「第二著作は別の機会に論じたい。」

Max Black, *Language and Philosophy*, Cornell Univ. Press, 1949.

John Dewey and A. F. Bentley, *Knowing and the Known*, Boston, 1949.

真理理論

意味論的概念として注目されることもはやく、また確立も早かったのは「is true」の語法である。また、これについては既にギリシア時代にエピメニデースに帰せられる「虚言者の背理」などが知られていた。次の第一論文は、意味論的概念の確立の劇的な労作であり、第三はその非技術的な要論である。

A. Tarski, "Der Wahrheitsbegriff in den formalisierten Sprachen," *Studia Philosophica*, Vol. I, Lwów, 1935, 261-405. (w. bibliogr.)

Maria Kokoszynska, "Über den absoluten Wahrheitsbegriff und einige andere semantische Begriffe," *Erkenntnis*, Bd. VI, 1936, 143-165.

A. Tarski, "The semantic Conception of Truth," *Philosophy and Phenomenological Research*, IV, 1944; *apud* [Feigl-Sellars], 52-84.

哲学文献紹介

「真」を定義することは構造が厳密に特定されている言語にとってだけ正確にできる。そうした言語であれば、それが体系中の表現に加えてその表現を名ざす名と、体系中の表現を指示する意味論上の「真」その他の語句を含み、それらの語句の十分な用法を決定するすべての文もこの体系中に含まれているような場合には、上記の類の背理が起るのである。そうした言語を「意味論上で閉じた」言語と呼び、これを使わないことにすべきである。それならば、元来の「対象言語」(object-language)と、それについて語る「メタ言語」(meta-language)の二つを使わねばならない。後者の表現のうちには前者のなかの表現がすべて含まれているものとする。さて、そのメタ言語のなかで「真」の定義が生じうるためには、次のような「(T)-form」とよばれている等値式(... if and only if---)の文がすべて、その「真」の定義の論理的帰結とならねばならぬ。

(T) X is true if and only if *p*.
ここで '*p*' は対象言語のなかの任意の文が代入される場所を示し、'*X*' は '*p*' に代置される文の「名」を代表するものとする。「真」の用法が起るメタ言語は対象言語のなかの文の名をも含まねばならないことが知られる。これらは、「真」が定義されるための必要条件である。

さて、「真」を定義するには、一連の公理によって「真」について認めるべき性格を表明しておく仕方以外には、「満足する」というメタ言語の中の語を使ってするのがよい。任意の対象と、自由変号を含んでいる文函数 (sentential function)

又は文形式の間に、前者が後者を満足する「例えば 'snow' は x is white を」という関係を使用する。どの対象が最も簡単な文形式を満足するかを一覧表にしておく、より複合的な文形式についての満足または不満足を言うことができる。文形式のなかの自由変号に適当な代入の行われた結果、すなわち「文」はすべての対象によって満足されるか、どの対象によっても満足されないかのいずれかである。前者の場合にその文は真であり、後者の場合にその文は偽である。こうして「真・偽」の定義に至るのである。

この真理理論の一般的な教訓は、意味論上の語句は閉じた言語の中では背理をひきおこすこと、つまり対象言語よりは豊富なメタ言語の中で形式されなければならないことである。そうした意味論上の語句は「単称語が」「指名する」「一般名が」「標記する」(denote)「又は該する」(is true of)、同意語、定義などであり、それら又はそれらの派生語は形而上学体系のなかでしばしば逆説をひきおこしてきたものである。

なお、メタ言語という性格は相対的であり、複合度の高い意

味論的語句が一つ加わることにほとんどの場合、もとの言語に對してそのメタ言語を新たに得ると考えてよい程に相対的であることも注意せられるべき点である。第二論文はその点に注意を払った論文である。

〔次回へ続く〕